セム諸語の語構造に対する一般言語学的アプローチ

General Linguistic Approach for
Semitic Word-Structure高橋 洋成^{*}
TAKAHASHI Yona

ABSTRACT Semitic morphology has been a “puzzle” for linguists. The aim of this paper is to clarify the morphological nature of Semitic “root” and “pattern,” and to define them from general linguistic point of view.

The main function of the Semitic root is to dynamically mediate between a word and a new word derived from it by carrying over the meaning and consonantal structure of the former to the latter. Linguistically speaking, the element which has this function should be called a base. Hence the Semitic root can be regarded as a sort of base consisting of consonants only.

The Semitic pattern has a structure predictable by a phonological rule, i. e. the syllabification rule (Goldsmith 1990). In the CV-skeleton formulated by the syllabification rule, consonantal elements, such as radicals (each consonant of the root) and some derivational affixes, and vocalic elements are arranged according to their morphophonemic motives. This method reveals the synthetic structure of derived words, which has been overlooked by the traditional analytic approach.

I. はじめに

セム諸語の形態論は, “one of the classic puzzles for morphological analysis” (Anderson 1992, 57) と評されるように, 極めて複雑な様相を見せる。接頭辞・接中辞・接尾辞・両面接辞といったさまざまな種類の接辞付加もさることながら, 最大の特徴として挙げられるのは語根 (root) と語型 (pattern)⁽¹⁾に基づく内的交替の複雑さであろう。子音の重複や母音交替, それに伴う音節構造の変化はまさに「パズル」である。だが一方で, この言語を母語とする話

* 筑波大学大学院博士課程
Ph. D. Student, University of Tsukuba

者は、子供でさえその「パズル」を使いこなしている事実も忘れてはならない。セム諸語における形態論の目的は、子供でも使いこなせる「当たり前の事実」を体系化し、母語話者ですら気付いていない（あるいは母語話者だからこそ気付かない）言語の構造を明らかにすることにある。

語根はしばしば純粹に語彙的な要素と見なされ、3字性 (*triliterality*) と呼ばれる特徴を利用して辞書の編纂がなされる。だが実際には、語根は形態論的な要素でもあり、語形成において重要な役割を果たす。語根と語型に基づく語形成のプロセスを体系的に記述すべく、これまでさまざまな枠組みが提案されてきた。そもそも、語根と語型という概念を生み出したのは中世アラビア語文法家であるが、20世紀に入りガーベレンツ G. von der Gabelentz はアラビア語の *kātil* を、*k-t-l*「殺す」と *ā-i*「動作主」という2つの「語根」の浸透 (*Durchdringung*) によるものと分析した (Gabelentz 1901)。彼の言う「語根」は、今日的に言えば形態素と言い換えることができよう。また、カンティノ J. Cantineau は、ソシュールの系列 (*paradigm*) の概念をアラビア語の語形成に対する説明原理として用いた (Cantineau 1950)。たとえば、ʔabyaḍ という語は、*bayḍāʔ-*, *bayyaḍa*, *biḍ-*, *bayāḍ-* といった *b-y-ḍ*「白」の系列に属する。また、この語は同時に ʔaḥmar-, ʔazraq-, ʔaswad-, ʔašfar- という色彩形容詞の語型 (ʔafʔal) の系列に属している。つまり、ʔabyaḍ という語は、*b-y-ḍ* 系列と ʔafʔal 系列が交差した位置に存在する。

このようにさまざまな説明原理が用いられる中で、ここでは特に2人の学者のアプローチを対照したい。1人は、バビロニア語の語構造を、形態的要素の分布に基づく構造主義的なアプローチによって分析したブチェラティ G. Buccellati である (Buccellati 1996)。彼によれば、語根とは語彙的信息を含む予測不可能な不連続形態素である。語根に具体的な「形」を与える不連続形態素が語型であり、この両者が互いに織り重なる (*interdigitate*) ことによって核 (*core*) を形成する。⁽³⁾

pattern	a aa	ma a	u a i
root	r k s	rk s	p r s
core	rakaas	markas	uparris

こうしたブチェラティの枠組みは (図1) のように表すことができよう。語

根はそれ自体で存在する一方、語型は子音要素と母音要素に分析可能である。だが、子音要素と母音要素は、それ自体では形態的な機能を持たず、組み合わせり語型となることではじめて形態素となる。

図1 ブチェラティの語形成構造

注目すべきもう1人はゴールデンバーグ G. Goldenberg である (Goldenberg 1994)。彼は、上記のブチェラティの枠組みなどを援用しつつも独自の分析方法を打ち立て、セム諸語の語構造に一定の共通性を見出した。以下にアラビア語動詞の例を示す。⁽⁴⁾

	完了形	未完了形	命令形	語根パターン
第II形	sallam-a	y-usallim-	sallim	s-ll-m
第IV形	Haxbar-a	y-uHaxbir-	Haxbir	H-xb-r
4 語根素動詞	ġamhar-a	y-uġamhir-	ġamhir	ġ-mh-r
語幹パターン	■a■a■	u■a■i■	■a■i■	■-■-■

アラビア語派生動詞の形態的特徴は、第II形は第2語根素の重複、第IV形は接頭辞?である。異なる形態的特徴を持つかに見える2つの動詞であるが、ここで語幹パターン (*thematic pattern*) に着目すると、実は両者とも同一パターンに属していることに気付く。この語幹パターンとは何かについてゴールデンバーグ自身は慎重に明言を避けているものの、これらは音節構造を共有していると言い換えることができるかもしれない。つまり (図2) のように、語にお

図2 ゴールデンバーグの語形成構造

ける母音構造と、語根を含む子音構造を対置させたときに、ある一定のパターンが見出されることを彼は明らかにした。

ブチュラティもゴールデンバーグも、語根、子音要素、母音要素という3つの要素を考える点では一致しているように思われる。だが、語形成のプロセスにおける要素の組み合わせ方に、両者の考え方の違いが現れている。このように、セム諸語の「語形成構造の体系的な記述」と一口に言っても、その内実は学者によってさまざまであることが分かる。

こうした状況を踏まえ、本稿では「語形成構造の体系的な記述」の一般言語学的な基礎付けを試みたい。具体的には、(1) 語根・語型という概念について、一般言語学的な見地からの再検討を行うこと、(2) それに基づき、セム諸語における語形成プロセスを記述するための、筆者なりの枠組みを提案すること、この2点を目的とする。ここで「一般言語学的」と冠した意図は、語根・語型を「前提とする」従来の記述ではなく、通言語的な、より一般性のある記述を目指すということである。それにより、セム諸語の語構造において、従来の枠組みでは見落とされがちだった部分に光を当てることができる。同時に、セム諸語の分析によって得られた知見を、他の諸言語の記述に役立てることも可能になるだろう。

II. 「語根」の形態論的位置付け

1. 「語根」への疑念

語根は「不連続な子音の列」である。このような発音すら困難な不自然な要素をどう位置付けるかという問題は、セム語学者を絶えず悩ませてきた。⁽⁵⁾ ブロッケルマン C. Brockelmann は、語根という概念は、科学的な音声学や音韻論のためには無益なものであり、形態論にとっても不要と考えた (Brockelmann 1999 I, 287)。そして、名詞類および動詞の分析によって得られる基本形 (e.g. *kaṭl*, *kitl*, *kuṭl* など) を語基 (*Basen*) と名付け、形態論の分析対象はこの語基までに止めるべきと述べている。だが、セム諸語における語根が持つ造語力、またそれに伴う「語根を共有する語のグループ」の存在は否定しがたい事実であり、ブロッケルマンの主張は急進的に過ぎる感が否めない。

今日では、語根を形態素とする見方が一般的である。だが、一般に形態素とは「意味を有する最小の音形」のことであり、上記のブロッケルマンのように

「不連続な子音の列」という不自然な音形に抵抗を感じる学者もいる。語根の位置付けの問題は、セム諸語のみならず、一般言語学的にも関心の高い問題であろう。そこで、まず一般言語学的な用語の整理をしておきたい。

2. 語形成プロセスにおける語基の役割

一般に、語は、単語 (*simple word*) と複合語 (*compound*) に大別される。単語は、それ自体が1つの形態素である場合もあるが (聖書ヘブライ語の ⁽⁶⁾ *sus*「馬」)、複数の形態素によって成り立っていることもある (*sus+im*「馬+男性複数」)。このように、語形 (*word form*) を構成することを語形成 (*word formation*) という。また、語形成は大きく2種類に分けられる。ある語から新たな語を作り出すことを派生 (*derivation*) と呼び、ある語が文中において他の語との文法関係を表すために語形変化を行うことを屈折 (*inflection*) と呼ぶ。派生にしろ屈折にしろ、Iで触れたように、セム諸語における語形成の手段は極めて多様である。

さて、ここで「語基」という用語を検討しておきたい。一般に、語基という用語はさまざまな使い方をされ、厳密な定義が存在しない⁽⁷⁾。だが、少なくとも「何らかの語形成手段が適用される形」という点では、ほとんどの学者の賛同を得られるだろう。本稿では、これを語基の定義としたい。すなわち、語基とは、語を分析して「ここからここまでが語基」と判別するものではない。語形成のプロセスの中で、語形成手段として選択された要素の相手として、これと結合する形のことである。たとえば、日本語で *aruk+u*「歩く」という動詞から、*aruk-* という部分だけを取り出し、これに接尾辞 *-i* を付けると *aruk+i*「歩き」という名詞を作ることができる。このとき、接尾辞 *-i* の相手となる *aruk-*⁽⁸⁾ のことを、本稿では語基と呼ぶ。

語基は分析によって得られる単位というよりも、結合するための単位であり、語形成要素の相手としてのみ意味を持つ。⁽⁹⁾ したがって、同じ語であっても、着目する語形成要素が違えば、それに対応する語基も異なる。なぜこう考えることが必要かと言えば、新しい語を作り出す場面では、あらゆる要素が語基となりうるからである。たとえば、英語の *give* という動詞を日本語話者がそのまま語基として採用し、これに接尾辞 *-suru* を付加して「*gibu+suru*」という新たな語を作り出すこともできる。語形成要素 (上述の例では接尾辞) を適用しうる

形である限りにおいて、何を語基とするかは、話者が自由に選択しうる。さらに、「語基＋語形成要素」によって得られた形を、さらに語基として語形成要素を付加する場合もある。日本語では、語基 *tabe-* に使役接辞 *-sase* を付加して形成された *tabe+sase* という形を語基として、受身接辞 *-rare* を付けて *tabe+sase+rare* とし、さらにこれを語基として終止形接辞 *-ru* を付加して *tabe+sase+rare+ru* 「食べさせられる」となりうる。日本語のような、いわゆる膠着語型の言語では、語基が多段階に拡張されうる。このように語基とは流動的な要素である。

ここまで膠着語型言語を挙げてきたが、内的変化を主な語形成手段とする言語では、語基はどのような姿を見せるだろうか。マシューズ P. H. Matthews は、ニジェール語の興味深い例を紹介している (Matthews 1991, 141)。それによると、ニジェール語の動詞は動詞は *dāl* 「優る」、*mɔ̀pɔ̀s* 「壊す」のように常に低音調を伴うか、あるいは *ra:* 「従う」のように中音調を持つ。一方、名詞は *dāl*, *mɔ̀pɔ̀s*, *rá:* のように高音調を伴う。動詞も名詞も分節音のレベルでは同一であり、音調が動詞と名詞の弁別機能を果たしているのである。したがって、動詞か名詞のどちらか一方が与えられれば、以下のプロセスによってもう一方も規則的に作り出すことができる。

- 音調をかぶせるための語基の選択。たとえば *dāl* という動詞の音調を削除して、*dal* という分節音の塊を語基として選択する。
- 語形成手段としての音調の付加。*dal* という語基に対し、名詞を表す高音調をかぶせて名詞 *dāl* を作り出す。

このように、語形成語のプロセスの中で、もとなる語（これを便宜上「基盤語」と呼ぶ）と、新たに生み出された語との間には、媒介として語基が必ず存在する。一般に、語基は新たな語に対して、形態的には語形上の基本部分を提供し、意味的には語彙情報を継承させる。

3. 語形成プロセスにおける「語根」の役割

さて、ここで話を語根に戻したい。セム諸語における語根の造語力は、いったいどのように説明することができるか。この点について、ラヴィッド D. Ravid は、語根の心理的実体に迫るべく、現代ヘブライ語の母語話者に対してアンケート調査を行った (Ravid 1990)。その結果の一部を以下にまとめる。

- (1) 母語話者の直観として最も良い「語根」の基準は、「動詞と語根を共有している」ということである。
- (2) 語根の主要な機能は、派生の基盤となる語 (base) と、そこから派生する新たな語との動的な媒介として、基盤語から派生語に意味と子音構造を持ち越すことにある。
- (3) 教育を受けた学生であっても、いわゆる弱語根については、mevin「理解」から b-y-n を、magiš から n-g-š を全員が抽出できたわけではなかった。そのことは、語根の心理的な実体が失われたことを示唆している。

報告 (1) は、ある語が与えられたとき、その語が必ずしも語根を持つとは限らないということである。聖書ヘブライ語を例にとると、名詞 *ʔab*「父」、*ʔeb*「つばみ」、*ʔob*「霊媒師」という3つの名詞は全て共通の子音列 *ʔ-b* を持っている。しかし、これら3つの語には、意味と子音列を共有する動詞が存在しないため、*ʔ-b* を語根と見なすことはできない。同様に、*ħereb*「剣」と *ħerob*「日照り」という語のペアは *ħ-r-b* という子音列を共有してはいるものの、やはり意味と子音列を等しくする動詞が見当たらないため、*ħ-r-b* は語根ではない。一方で、*poked*「参加者」、*mipkad*「召集」、*p̄kuddo*「訪問」、*p̄kid*「行政官」など、子音列 *p-k-d* を共有する語のグループには、*p̄kod*「集まる」という動詞も含まれている。このとき、*p-k-d* は語根と呼ばれる。

ただ、報告 (1) に反して、動詞は見当たらないけれども、意味と子音列を共有する名詞類のグループも存在すると思われる。たとえば、*ʔereb*「夕」と *maʔarob*「西」という2つの名詞は「日が沈む」という類似性が認められるため、両者に共通する子音列 *ʔ-r-b* を「日が沈む」を意味する語根と見なして良いかもしれない。⁽¹⁰⁾ だが、この語グループには、同じ子音列を持つてはいても *ʔereb*「混ざり合うこと」を含めることはできないだろう。ここで、報告 (2) に注目したい。語根とは、派生の基盤となる語と、派生語との間の動的な媒介であるということだが、これは II. 2. で見た語基の特徴と全く同じである。もし *ʔ-r-b* を語基と見なすならば、語型は語形成手段として位置付けることができる。*ʔereb*, *maʔarob*, *ʔereb* の3つの語において、語型として確認できるのは抽象名詞を作る *ma-ʔ-* のみであり、それゆえ *maʔarob* は派生語、他の2つは非派生語であると見なすことができる。*maʔarob* の基盤語と見なしうるのは、意味的に考え

て ʔεrɛb であろう。すなわち, maʔʳɔɓ は, ʔεrɛb から語基 ʔ-r-b を媒介として形成されたものと考えることができる。

こうした理由から、動詞を持たない名詞類のグループでも、語基としての語根は存在しうる。ではなぜ報告（1）のようなことが言われるのか。おそらく、名詞類よりも動詞の方が閉じた体系を有しているため、語基としての語根を安定して抽出しやすいことによるのではないだろうか。⁽¹¹⁾

以上から、セム諸語における語根とは、語形成プロセスにおける語基として再解釈することができよう。語根（語基）は、語型（語形成手段）に当てはめるべく、もとなる語（基盤語）から選択される。セム諸語においては、語形成手段たる語型は子音を要求するため、必然的に語基たる語根は子音によって構成されることになる。語基たる語根は、基盤語から派生語に対して、語形を支える子音列を提供すると同時に、語彙的情報の継承を行う。

基盤語		ʔ	ε	r	ε	b
		↓		↓		↓
語基（語根）		ʔ		r		b
		↓		↓		↓
語形成手段（語型）	ma	C		C	ɔ	C

語基（語根）を媒介として派生語を作り出した後、語基（語根）はその役割を終える。とは言え、かつての語基（語根）部分が鮮明に判別可能ならば、同じ部分を語基（語根）として別の派生語を作り出すこともでき、こうして語基（語根）を共有するグループが形成されていく。しかしながら、話者にとっては、語基（語根）が何かということよりも語そのものが重要であるのだから、音形の変化によって、かつての語基（語根）部分が不鮮明になっても、言語を使用する上での大きな支障はない。ラヴィッドの報告（3）は、いったん「姿を消した」語基（語根）を再び取り戻すことがいかに困難かを示唆している。民俗語源による「誤った」解釈によって、話者が本来とは異なる子音や意味を語基（語根）と見なし、新たに形成された語も少なくない。⁽¹²⁾

4. 「語根」の定義

これまで「語基としての語根」あるいは「語基（語根）」という表現をしてき

たが、実際には語根とは認めがたい語基も多々ある。典型的には、接辞付加による語形成の場合がそうである。聖書ヘブライ語の $\text{mkattb} + \text{im}$ 「書く者たち」や、 ?+ektob 「私は書く」のような語形成において、 mkattb- や -ektob は語基ではあるが、語根とは呼べない。したがって、語基と語根との関係を次のように定義する。

- 基盤語から不連続な子音の列を語基として選択したとき、その子音列は伝統的に語根と呼ばれる。なお、語根の個々の子音を語根素 (radical) と呼ぶ。

また、語幹についても次のように定義しておきたい。

- 屈折の語形成手段が適用される語基を語幹と呼ぶ。

III. 「語型」の構造と語形成プロセスの記述

1. 3 語根素性をもたらす「語型」

II. 2. で「語形成要素を適用しうる形である限りにおいて、語基の選択は自由に行われうる」と述べた。では、セム諸語における語根が語基の一種であるならば、語根もまた自由に選択されうるのだろうか。現代ヘブライ語では、あまり頻繁とは言えないが、外来語を基盤語として語根素を抽出することがある。このとき、基盤語が持つ意味と音形との対応を失わない程度に子音を選択しようとし、語根素の数が通常より増えることもある。

基盤語彙の選択	t	e	l	e	g	r	a	p	h
	↓		↓		↓	↓		↓	
語基 (語根)	t		l		g	r		f	
			\			/			
語形成手段	C	i		C	C		e	C	
結果	tilgref								

このように、語根素の選択も比較的自由に行われうる。ただ、語根素の数が多いからと言って、語形成手段としての語型のスロットの数まで自由に変更するわけにはいかない。そこで上記の例では、全ての語根素を語型に当てはめべく、語型の2つの子音スロットに対して3つの語根素を詰め込むという苦しい手段を用いている。こうした語型の「自由の無さ」あるいは「強制力」は、

ラヴィッドの報告にある子供の言い間違いの例からも示唆される (Ravid 1990, 307)。それによると、同じ意味を持つ語の語型は早期に習得され、幼年時代には過剰に適用されることもある。たとえば、子供が使った *ima mašta et hatinok* 「お母さんが赤ちゃんに飲ませている」という文では、子供は慣習的な *maška* 「飲み物を与える」ではなく、語根として *š-t-y* を用いている。だが、使役を表す語型 *ma--i-* は正しく用いているのである。

語形成手段としての語型の多くは4つの子音を要求する。ただ、その4つの子音スロットのうち、1つは派生標識ですでに埋められていることが多い。上記の例 (*ma--i-*) では、最初の子音スロットはすでに *m* が占めている。したがって、スロットを埋めるべく3つの語根素を抽出するのが最も合理的であろう。セム諸語においてよく言われる「語根の3字性」あるいは「3語根素性 (*triradicalism*)」とは、語型によって要求される語根素の数を端的に言い表したものであり、決して語根に内在する特徴とは言えないのである。

2. 自動音節化規則

語形成のプロセスの中で、語基として3つの語根素が選択されるのは、語形成手段としての語型がそれを要求するからである。ここで、なぜ語型がそのような構造を有しているのか、という点について考察したい。

I で触れたように、ゴールデンバーグは、語型をスロット構造と見なすと、いくつかの語型を包含する共通性が浮かび上がることを看破した。もっとも、彼の言う「スロット」とは何かという点は明らかではない。もし、このスロットを音節構造と見なすならば、語形成要素としての語型の音節構造の共通性は、マッカーシー J. McCarthy がすでに論じている (McCarthy 1985)。たとえば、アラビア語の *haatam* 「印」、*ḡundab* 「蝗」の複数形はそれぞれ *ḥawaatimu*, *ḡanaadibu* である。前者はいわゆる *qawaatilu* 型の複数形であり、後者は *qataalidu* 型に属する。しかし、ここで両者の音節構造に着目すると、両者とも *CVCVVCVC+u* という子音と母音の配列構造 (マッカーシーは鋳型 (*template*) と呼ぶ) を有しており、この配列構造に対して *a-aa-i* という母音要素 (マッカーシーはメロディー (*melody*) と呼ぶ) が結び付けられている。また、アッカド語において、いわゆる Š 語幹 (使役語幹) を持つ動詞の不定詞は *šuprus+um* 「分けさせる」、D 語幹 (重複語幹) を持つ動詞の不定詞は *purrus+um* 「分け

る」である。前者の形態的特徴は接辞 *-s* の存在であり、後者の形態的特徴は第2語根素の重複であるから、この2つは全く異なる語形成のように見える。だが、やはりここにも CVCCVC+um という子音・母音の配列と、u-u という母音要素の共通性が見られる。両者の唯一の違いは、子音要素（語根素、派生接辞）の配列の仕方のみである。

このようにマッカーシーは、語形成において各要素が属する層 (*tier*) を大きく3つに分けた。1つ目は子音層であり、ここには語根素や子音接辞などが属する。2つ目は母音層であり、母音交替はこの層に属する要素が交替することによって生じる。3つ目は子音と母音の配列構造（これを便宜上 CV 骨格と呼ぶ）であり、この層に属する各 CV 骨格は、それ自体が1つの形態素である、と述べる。

だが、ラトクリフ R. Ratcliffe は、CV 骨格が形態素であるというマッカーシーの主張に対して反論を試みている (Ratcliffe 1998 29-31)。ここでラトクリフが根拠としたのは、ゴールドスミスが提唱した、音節化に伴う通言語的な原則（音節化規則）である。一般に語の性質として、子音と母音という分節音を配列するときに、語のどちらか一方の端から、可能な限り重い音節を構成していく傾向がある (Goldsmith 1990, 123)。たとえば、アラビア語動詞の第 X 形 'istaffal+a を見ると、この語に含まれる子音要素は s, t, f, ʔ, l, 母音要素は a, そして CV 骨格は CCVCCVCV である。ここで、CV 骨格が与えられなかった場合はどうなるだろうか。子音要素と母音要素の配列方法の可能性だけを列挙すれば、'isatafaʔal+a (⁽¹³⁾šššššššš), 'isatfaʔal+a (šššššššš), 'isataffaʔal+a (šššššššš), 'istaffal+a (šššššššš) 等、さまざまなパターンが考えられる。しかし、音節化規則に従えば、この中で最も重音節を多く含み、音節数が最小であるものを選択すれば 'istaffal+a に決まる。したがって、CV 骨格はマッカーシーが主張するような形態素ではなく、子音要素と母音要素が与えられれば音節化規

則によって規則的に構築可能なものと考えられる。

3. 聖書ヘブライ語の派生動詞形成プロセス

音節化規則に基づく記述の一例として、以下では聖書ヘブライ語の派生動詞における語形成のプロセスを考えてみたい。

聖書ヘブライ語の派生動詞は、子音構造に着目すれば、(1) 子音接辞を持たない無接辞動詞 (Piel, Pual), (2) h 接辞を持つ h 接辞動詞 (Hiphil, Hophal), (3) t 接辞を持つ t 接辞動詞 (Hithpael), (4) n 接辞を持つ n 接辞動詞 (Niphal) に分けられる。今、基盤語として *yikṭol* 「彼は殺す」が選択され、ここから語根素として *k-ṭ-l* の3つが抽出されたものとする。これらの語根素と子音接辞という4つの子音要素を用いて、派生動詞の語型を形成するプロセスについて考えてみたい。なお、紙面の都合上、ここでは非母音交替形 (Piel, Hiphil, Hithpael, Niphal) の接頭辞活用形のみを考える。

	実現形	基底形	CV 骨格
無接辞動詞	<i>yḵattēl</i>	<i>yəṭṭattil</i>	C(V)CVCCVC (ə)ōō
h 接辞動詞	<i>yaḵtil</i>	<i>yəṭṭaḵtil</i>	C(V)CVCCVC (ə)ōō
t 接辞動詞	<i>yitḵattēl</i>	<i>yitḵattil</i>	CVCVCCVC ōōō
n 接辞動詞	<i>yikḵōṭel</i>	<i>yikḵaattil</i>	CVCVVCVC ōōō

上掲の表では、全ての派生動詞において最終音節が *ṭel* (基底形では *til*) で安定していることに着目する。つまり、音節化規則が語末から語頭へ (右から左へ) 働いていると考えられる。⁽¹⁴⁾

無接辞動詞の場合、子音要素が3つの語根素しか存在しない。かつ、語末の最終音節が *ṭVl* で決定済みであるから、CV 骨格の候補は *CṭVl* あるいは *CVXṭVl* のどちらかである。⁽¹⁶⁾しかし前者は非派生動詞 (Qal) と紛らわしいため、後者の形しかありえない。一方、h 接辞動詞では、3つの語根素に子音接辞 h を足して、合計4つの子音要素が存在する。これらを音節化規則に基づく重音節の連続として構成するには、CVCCVC であれば良い。したがって、無接辞動詞と h 接辞動詞は同一の音節構造を持つ。なお、無接辞動詞では、コードの X スロットを埋めるべく、後続する子音要素を重複させてこれに当てる。結果として、⁽¹⁷⁾無接辞動詞では第2語根素の重複が生じる。

動詞語幹の先頭には子音連続 tk-, nk- があるため、このまま人称接頭辞 y- を付加すれば CCC という子音連続を。それゆえ、余ったスロットを利用して、人称接頭辞と語幹との間に補助母音 i を挿入する。⁽²¹⁾

以上より、聖書ヘブライ語の派生動詞における接頭辞活用形の語形成プロセスを以下にまとめる。

- a. 動詞の派生プロセスにおいて、音節化規則は語末から語頭へ（右から左へ）働く。
- b. 無接辞動詞と h 接辞動詞では、3つの語根素と1つの子音接辞を用いて CV 骨格を構成する。
- c. t 接辞動詞と n 接辞動詞では、第1語根素に接辞付加することで拡張語基を形成し、それを用いて CV 骨格を構成する。

さて、このようなアプローチは従来の分析方法とは何が異なるのか。第1に、従来は無接辞動詞、h 接辞動詞、t 接辞動詞、n 接辞動詞はそれぞれ意味も形態的特徴も異なるものと見なされていた。しかし、CV 骨格の共通性に着目すれば、これらは2つのグループに大別することができる。すなわち、(σ)σσ という音節構造を持つ無接辞動詞と h 接辞動詞のグループと、σσσ という音節構造を持つ t/n 接辞動詞のグループである。これらは非再帰語幹を持つグループと、再帰語幹を持つグループと呼んでも良いだろう。⁽²²⁾ 両者の音節構造の違いは、語基に派生接辞が付加されて拡張語基を形成するかどうかによるものである。このことから、従来は動詞派生接辞と一括して呼ばれてきたものは、h と t/n とで異なる語形成機能を有していることが明らかになる。

第2に、語型という概念は語を正規化してしまい、異形態の存在を許容しにくい。だが、このアプローチは異形態の存在を無理なく説明でき、かつその存在を予想しうる。たとえば、サマリア式の聖書朗読（ここではサマリア方言と呼ぶ）では、t/n 動詞の形態的特徴が著しく混乱している。t 接辞動詞でありながら子音重複ではなく母音延長を起こした titgādēdu (Ben-Ḥayyim 2000, 119), あるいは n 接辞動詞でありながら子音重複を持つ tikkābbās (ibid., 117) のようなものは決して珍しいものではない。だが、こうした事例は、t/n 接辞動詞の CV 骨格におけるコーダスロット X を埋める方向に変化が生じたものと考えられる。話者にとっては、語の全体としての音形（とそれに伴う意味）を相手に伝えることができれば十分であるから、語の内部における要素の配列を

必ずしも厳密に行う必要はない。したがって、形態論的に強い動機を持つ配列方法と、そうでない副次的な配列方法とが峻別されうる。サマリア方言の例を見るに、h 接辞動詞における「第2 語根素の重複」という形態の特徴は、必ずしも形態論的な強い動機に基づくものではなく、単に CV 骨格における余剰スロットを埋めた結果に過ぎないと考えられる。

このように、CV 骨格の構築と形態的要素の配列というアプローチは、従来の「語根+語型(+...)」という単純な足し算的アプローチでは見えてこなかった、さまざまな形態的側面を浮き彫りにすることが可能である。

IV. 結 論

本稿では、セム諸語の語形成構造を体系的に記述すべく、その要件として従来「語根」と「語型」と呼ばれてきたものを一般言語学的な見地から整理し、新たな枠組みを提案した。本稿における主張を以下にまとめる。

(1) セム諸語の形態論において、伝統的に語根と呼ばれてきたものは、語形成（特に派生）において必要とされる語基の一種と考えられる。語基は、派生のもとになる語と、派生語との間の媒介として、派生語に対し語彙情報と語形の基本部分を提供するものであるが、セム諸語においては不連続な子音列が語基となりうる。この子音列を伝統的に語根と呼び、個々の子音を語根素と呼ぶ。語根素は語型に合わせられるべく、派生のもとになる語から必要なだけ抽出される。

(2) 派生語を形成する媒介としての役割を果たした語根は、もはやそれ自体は意味をなさない。ただ、派生語の中に語根の音形が鮮明であるうちは写像的な機能を有し、新たな派生語を生み出す際に同一の子音列が語根として用いられる。その結果、語根を共有する語のグループが構成される。だが、語の音形や意味が不鮮明になり、かつての語根が姿を変えることも珍しくない。ゆえに、語根を語に内在する特徴であると考えるべきではない。

(3) 語形成要素としての語型は、それ自体が形態素であるというよりも、形態音韻論的な規則によって導き出される、予測可能な複合体である。従来の形態論は、語根・語型あるいは接辞といった個々の要素を単純に足し算していくという、言わば分析的なアプローチであった。それに対し、マッカーシーやラトクリフらのアプローチは、語という1つの容器物の中に、形態的な各要素

をいかに配置していくか、という統合的なアプローチと言えよう。セム諸語のように内的変化が豊富な諸言語の形態論においては、分析的アプローチよりも統合的アプローチの方が、語構造を鮮明に描き出せると思われる。

注

- (1) アラビア語文法における *wazn*, ヘブライ語文法における *miškol*。
- (2) マルティネが提案した記号素 (*moneme*) という用語を使うならば, *k-t-l* は語彙的記号素, *ā-i* は文法的記号素と呼ぶことができよう。
- (3) 詳細は Buccellati (1996, 53-56) を参照。
- (4) 表の第IV形における H は使役接辞を表す。この H は, アラビア語・シリア語では ? (語頭) ~∅ (語中) として現れ, その他のアラム語方言などでは h, h/? ~∅ のように実現される。また, 表における未完了形は基底形であり, 実際には y-uxbir- のように Ha が脱落する。詳細は Goldenberg (1994, 38) を参照。
- (5) フォン・ゾーデン von Soden は, 語根を発音可能にすべく, 語根に特有の母音 (*Wurzelvokal*) を想定している (von Soden 1952, 51-52)。しかし, 必ずしも一貫性がある方法によるものではなく, また常に一定の母音が得られるわけではない。いわゆる語根母音については Goldenberg (1994, 30) を参照。
- (6) 聖書ヘブライ語のローマ字転写方式は池田他 (2003) で提案された筑波方式を使用する。
- (7) 『言語学大辞典 術語篇』によれば, 語基という術語は「いろいろな意味に使われ, 明確な定義はできないが, 総括的にいえば, 種々な接辞をとり除いた, 基になる形」である。したがって, 語幹の意味でも, あるいは語根の意味でも用いられることもある。
- (8) ただし, 日本語学や朝鮮語学では, 語幹に接辞が付加された形のことを語基と呼ぶ (e.g. kak+a+nai 「書かない」において, kak- が語幹, kaka- が語基)。本稿では, 語基という用語を, それとは異なる定義で使用していることに注意してほしい。
- (9) 言語が二重分節構造を持つことは周知の事実であるが, 分節とは逆方向の結節構造も存在する, ということが宮岡 (2002) で述べられている。形態素が分析によって得られる分節単位であるのに対し, 語は要素の統合によって得られる結節単位である。この点で, 本稿における語基とは, 分析的単位ではなく, 結節における 1 要素である。語基は必ずしも形態素である必要はなく, 語形成要素と統合し, 語という結節単位を形成するための要素に過ぎない。
- (10) ただし, 文献上は確認できないものの, 実際には動詞が存在していた可能性もある。実際, アッカド語の *erēbu*, ウガリト語の *qrb* のように, 歴史的に見れば「日が沈む」という意味の動詞は確実に存在していたであろう。なお, これらの例について, 匿名の査読者の方々から多くの御指摘を頂いたことに感謝する。

- (11) この点に関して、ブチュラティは「あらゆる動詞には語根が必要であるのに対し、名詞類はそうではない」とし、語根について3種類を分けて論じている (Buccellati 1996, 57-60)。(1) 動詞語根 (*verbal root*)。動詞が存在すれば、必ずそれに関連する名詞を作ることができる。(2) 名詞類語根 (*nominal root*)。名詞類でのみ共有される。(3) 語根を持たない名詞 (*unmotivated noun*)。
- (12) こうした例は聖書テキストに豊富に存在する。たとえば、地名バベルの語源を語根 b-l-l「混ざる」に求めている (創世記11章9節)。また、語根を語源と同一視する場合もある (『言語学大辞典 術語篇』における「語根」に詳しい)。実際、19世紀のヘブライ語学者らは、おそらくインド・ヨーロッパ比較文法の影響を受けてのことだと思われるが、従来の語根を「語幹」と呼び替え、「語根」と語源的な2子音として再定義しようとした (Kautsch 1910, 99-103; König 1979, 149-150)。だが、少なくともセム諸語における語形成手段としての語根を、語源という「虚構」と同一視すべきではない。
- (13) σ は軽音節 CV を表し、 $\bar{\sigma}$ は重音節 CVC/CVV を示す。
- (14) 無接辞動詞と h 接辞動詞における人称接頭辞 y- の後に母音が存在するか否かは、現時点では判断を保留したい。それゆえ、基底形のシュワには? を付けた。また、CV 骨格の疑わしい母音と、音節構造の疑わしい音節部分を括弧に入れている。これらは、以下の議論に本質的に関わるものではない。なお、現段階での筆者の推測では (a) 人称接頭辞の後には、形態論的には母音が存在しないが、(b) 接続詞などの先行要素が存在せず、語頭に子音連続 yk- が発生するときに、シュワを挿入して yak- となると思われる。逆に、waykattēl のように、先行要素がある場合には何も挿入されない。このシュワは、後述する t/n 接辞動詞で現れる補助母音 i とは異なり、CV 骨格において自身が属するスロットを持たないと考えられる。
- (15) アラビア語派生動詞の重音節付加が前接的であることについては Ratcliffe (1998, 30) を参照。
- (16) CVX は重音節を示す。音節末 (*coda*) の X は重音節を保証するためのスロットであり、子音と母音の両方が入りうる。
- (17) 第2語根素の重複という形態的特徴を、CV 骨格が要求する自動的操作の結果とする見方には、「語根素の重複」によって表される写像性 (たとえば強調、反復) を無視するものだという批判もある (Goldenberg 1994, 54)。だが、写像性という点ではどの語根素が重複しても良さそうなものであるのに、なぜ第2語根素でのみ生じるのか。この点を、音節化規則による CV 骨格構成はうまく説明している。そもそも、語根素の重ねがコードの充足によって実現されるという形態論的なメカニズムと、語根素の重複が持つ写像的機能という意味論の問題は、議論の領域が異なっているように思われる。
- (18) この点については注 (14) を参照。
- (19) 特に、n 接辞動詞では、第1語根素の重複の方がより本質的であるとする見方も可

能である (Buccellati 1996, 84)。

- (20) 後続要素によってコーダスロットを埋める方向は、音節化規則による重音節付加の方向に合致している。それゆえ、逆に先行要素によってコーダスロットを埋めるという場合には、かなりの形態論的な動機を見てとれよう。
- (21) 補助母音 i と、無接辞動詞・h 接辞動詞におけるシュワの違いについては注 (14) を参照。
- (22) ただし、t 接辞動詞 (Hithpael) の意味を再帰と見なすことには議論がある (手島 2000)。

参考文献

- Anderson, S. R. 1992 : *A-Morphous Morphology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ben-Ḥayyim, Z. 2000 : *A Grammar of Samaritan Hebrew*, Jerusalem: The Hebrew University Magnes Press.
- Brockelmann, C. 1999 : *Grundriß der vergleichenden Grammatik der semitischen Sprachen*, 2 vols., reprint of 1908-1913 ed., Hildesheim: G. Olms.
- Buccellati, G. 1996 : *A Structural Grammar of Babylonian*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Cantineau, J. 1950 : “La notion de «schème» et son altération dans diverses langues sémitiques,” *Semitica* 3, 73-83.
- Gabelentz, G. von der 1901 : *Die Sprachwissenschaft: Ihre Aufgaben, Methoden und bisherigen Ergebnisse*, 2nd edition, Leipzig: Tauchnitz.
- Goldenberg, G. 1994 : “Principles of Semitic Word-Structure,” in G. Goldenberg & Sh. Raz (eds.), *Semitic and Cushitic Studies*, Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 29-64.
- Goldsmith, J. 1990 : *Autosegmental and Metrical Phonology*, Oxford: B. Blackwell.
- Kautzsch, E. 1910 : *Gesenius' Hebrew Grammar*, translated by A. E. Cowley, Oxford: Clarendon.
- König, F. E. 1979 : *Historisch-kritisches Lehrgebäude der hebräischen Sprache*, 3 vols., reprint of 1881 ed., Hildesheim: G. Olms.
- Matthews, P. H. 1991 : *Morphology*, Second Edition, Cambridge: Cambridge University Press.
- McCarthy, J. 1985 : *Formal Problems in Semitic Phonology and Morphology*, New York: Garland.
- Ratcliffe, R. 1998 : *The 'Broken' Plural Problem in Arabic and Comparative Semitic*, Amsterdam & Philadelphia: J. Benjamins.
- Ravid, D. 1990 : “Internal Structure Constraints on New-Word Formation Devices in Modern Hebrew,” *Folia Linguistica* 24, 289-347.

- von Soden, W. 1952 : *Grundriß der akkadischen Grammatik*, Roma: Pontificium Institutum Biblicum.
- 池田潤他 2003 : 「聖書ヘブライ語のラテン文字転写について：文字学・文字論的考察と筑波方式の提案」『一般言語学論叢』6, 61-106.
- 亀井孝他（編） 1989-1996 : 『言語学大辞典』三省堂.
- 手島勲矢 2000 : 「Rashi のヒトパエル動詞理解：中世の聖書解釈とヘブライ語文法の問題」『オリエント』43, 70-83.
- 宮岡伯人 2002 : 「『語』とは何か：エスキモー語から日本語を見る」三省堂.